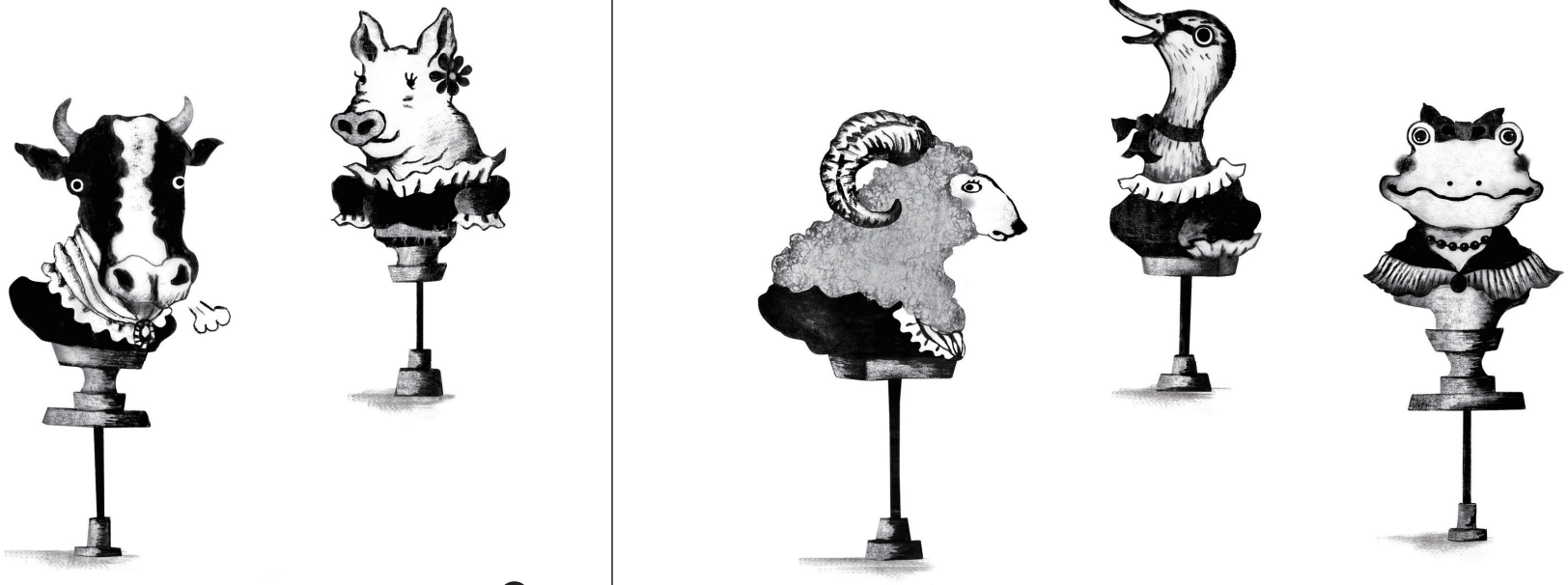
7e

Émile Zola

エミール・ゾラ

Les Repoussoirs

引き立て役



作品紹介

『引き立て役』（★★★★）

若い女性の美的レベルが全体的にかなり上昇・多様化した現代日本では、彼女たちがどんな同性同士のカップリングで街を闊歩しているのか、容易な分析を許しませんが、それでもよく観察していると、比較的美人の娘が、相対的に控えめな娘と「仲良く」ふたり連れだって歩くという、今となっては「古典的」といってもよさそうな光景に出会うことがあって、そんなとき、私などかえって懐かしくほっとした気持ちになるものです。優位に立った一方が劣位の他方を「一方的に利用する」というのとは違う、どこかしら「ウィンウィン」の関係が感じられるからでしょうか（この心理もなかなか微妙なものですが）。しかし、あらゆる事物から利潤を引き出そうとする資本主義は、美的な優位／劣位という構造も「露骨に」利用します。19世紀前半に活躍したバルザックも、たしかに、男女の美醜が人生にもつ大きな影響力を描いてはいました。ただそれは、「資本」とはひとまず無関係でした。美しさそのもの、醜さそのものに価値があるのではなく、それらの対立から価値が生まれること。美／醜が織りなす「差異」こそ利潤として捉えうること。したがって「美」は「醜」と切り離すことができないこと。こうした認識は、資本主義が新たな段階に入った第二帝政期に生きたゾラにだからこそ可能だったといえるのではないでしょうか。それにしても臆面のない、悲しくも衝撃的なお話ですよね。

著者紹介

エミール・ゾラ（1840〜1902年）

パリ生まれ。大学の入学試験に二度失敗し、出版社アシェット書店に就職。かたわら初期短編やマネなどの印象派を擁護する美術評論を書く。1867年に『テレーズ・ラカン』を発表。小説家として地歩を固めた。実証的な自然科学の方法を小説に持ち込み、「ルーゴン=マッカール叢書」と総称される、全20巻の小説を次々と発表。バルザックが「人間喜劇」で「ルイ=フィリップの治世にかんして行ったことを、より体系的に第二帝政について行う」という野心から、ルーゴン家とマッカール家一族の有為転変を描いた。中でも第7作の『居酒屋』と第9作の『ナナ』は大反響を呼び、売れ行きの点でも飛びぬけている。フランス軍参謀本部の大尉であったユダヤ人のアルフレド・ドレフュスが冤罪で逮捕されたいわゆる「ドレフュス事件」のさいには、新聞に「私は弾劾する」という大見出しのもと大統領への公開質問状を掲載し、反ユダヤ主義と軍部の不正を徹底的に糾弾した（事件とゾラの関係については、ウィリアム・ディターレ監督映画『ゾラの生涯』が克明に描いている。日本語版ＤＶＤ有）。「ルーゴン・マッカール叢書」完結後、「三都市」シリーズを完成。「四福音書」シリーズの執筆中に一酸化炭素中毒でパリにて死去。

★★★★

朗読 011

Les Repoussoirs

I

A Paris, tout se vend[1] : les vierges folles et les vierges sages, les mensonges et les vérités, les larmes et les sourires.

Vous n'ignorez pas qu'en ce pays de commerce, la beauté est une denrée dont il est fait un effroyable négoce. On vend et on achète les grands yeux et les petites bouches ; les nez et les mentons sont cotés au plus juste prix. Telle fossette, tel grain de beauté représente une rente[2] fixe. Et, comme il y a toujours de la contrefaçon, on imite parfois la marchandise du bon Dieu, et on vend beaucoup plus cher les faux sourcils faits avec des bouts d'allumettes brûlées, les faux chignons attachés aux cheveux à l'aide de longues épingles.

Tout ceci est juste et logique. Nous sommes un peuple civilisé, et je vous demande un peu à quoi servirait la civilisation, si elle ne nous aidait pas à tromper et à être trompés[3], pour rendre la vie possible.

1. tout se vend ⇒ 代名動詞の受動的用法。「パリではすべてが売られている」。ただし、日本語ではこの場合他動詞にするのが妥当。（読解のための文法：代名動詞の用法参照）
2. une rente ⇒「金利」、「年金」、「地代」などといった労働に依らない資産（不労所得）を言う。

引き立て役

I

パリではなんでも売っています。いけいけ姉ちゃんもお地味なお嬢さんも、嘘も真も、涙も笑いも。

ご存知のように、この商売天国では、美しさはとんでもない取引がなされる商品なのです。大きな眼や小さな口が売り買いされ、鼻や顎にもこれ以上ないほど妥当な値がつけられている。こんなえくぼならいくら、こんなほくろならいくらと、一定額の不労所得を表しているのです。しかも、いつの世にも模造品はあるもので、神の造りたもう商品まで模造し、マッチの燃えさしでつくった偽眉や、長いピンで留めたヘアピースの方がむしろ高く売られたりする。

ただそれもこれも無理からぬこと、至極当然の話です。なにしろわれわれは文明化された国民なのですから。人生というものを可能にするために、もしわれわれの騙し合いに手を貸してくれないとしたら、文明はいったい何の役にたつのか、私としてはむしろみなさんに伺いたい。

3. à quoi servirait la civilisation, si elle ne nous aidait pas à tromper et à être trompés ⇒ si ＋ 直説法半過去 , 条件法現在（「もし〜ならば、〜だろうに」という典型的な条件法の文。ただし、帰結節（主節）が前に、si に導かれる条件節（従属節）が後ろに来ていることに注意。（読解のための文法：条件法参照）